

ば、御懇志は寔以て難有次第也。乍去今程は飴細工にて隨分産業も有之、可なり妻子も養育仕居候へば、此上の望は會て無御座と、達て辭退しけるゆゑ、猶更能々思慮いたし候へとて、臺所へ退きける處、念頭に料理爲給歸されけり。所詮彼者は、強て申入るゝとも請けまじとて、重ねてせがれを呼び立られ、右の始終を被申ければ、左程の御芳志をば、無になしけるも不本意の次第、實に黙止がたき御事なり。さらば父に代りて腹藏なくありのまゝ可申上。過分の望には候へども、幸ひ我が近邊に米商賣株付の拂家あり。萬一是が償ひを賜はりて、右家産にあり付き、往々安樂に暮し候はゞ、是に増たる望は無御座と申けり。和尚其由委細聞居けられ、安き事なりとて、銀子六・七貫目許の合力ありしかば、則右家・株共に買求め得て、俄に富饒の身とぞ成にける。是ぞ陰徳陽報ならんか。近年の事なる由、嘉永三年十二月大浦氏咄也とぞ。

○大衆免中通

金屋町より大衆免へ入込む中央の通筋なるが故に、大衆免中通りと呼べるなるべし。扱此の通筋の左右に裏町數町あり。

り。大衆免十八町といへり。

○大衆免淨行寺

西派眞宗也。明細帳に云ふ。當寺開基徳善、天台宗之處、常に蓮師に歸依し、吉崎に於て謁し、眞宗に改宗、爲本尊二十字の名號を賜はり、石川郡割出村に於て文明七年四月創立、淨行寺と號す。後兵亂の際屢々移轉し、加賀郡北森下村に堂宇造立、北森山淨行寺と稱す。後東派と成り、金澤四丁二番町今下の水溜の地へ移轉し、延寶五年六月十六世智清西派と成り、其後大衆免今の地へ移轉すと。按ずるに、三箇屋版六用集に、西本願寺道場淨行寺四丁木町と見ゆ、寛保元年の過去帳に、當寺自明應七年草創已來所々移轉、歴亂世之忽劇。又移居於當城。百餘年來雖遇太平之時。回祿及數度。而名帳等終古相承之異實。悉失所在云々。加府淺川四丁二番町淨行寺。とあり。寛保より百餘年前は寛永年間なり。又今の地へ移轉は寛保の後なる事いぢるし。

○淨行寺開祖徳善傳

寺藏袖日記に云ふ。祖父徳善よくゝものがたりの條々、予幼年の頃なればいまだ聞も定めぬことども多かりけるま

ゝ、嚴父徳圓にもおしへられ、また伯父鎭木右衛門尉どのにも相尋、まだ審ならざるをば近隣古老の口説をたゞしあはせて、をりゝ毎に書とゞめ侍れば、これを袖日記となづけて壁底に残し置ものなり。とあり。扱其條々の事共をば、今左に略記して要文を採記す。

一、祖父つねゝ語り申さるゝ。蓮如上人の化導唯ひとかたならぬ辛苦を歴給へり。其故は、康正・長祿の比より天下戰鬪と成、佛閣といへども要害をかたどり、僧尼といへども擊劔を學ぶ心出來て、軍は常の業のやうに成、京・田舎共に色々の異儀ども出來て、寛正の頃は江州に於て堅田の本福寺等无碍光と云新義を興張して、山門・寺門をも輕蔑し、靈社をも疎略にする様になり、寛政六年の頃无碍光停止の一書を本願寺へ遣す。文明三年の頃、大谷本願寺頽破に及びき。文永年中より久しく御安座の堂舎たちまち頽廢におよび、蓮如上人は御眞影をまもり落退き給ふ。蓮如上人大谷御退去の後、近松の南別所に暫くやすらひ給ひ、それより江州在々所々、一夜二夜づゝ御經回ましゝき。徳善涙ながら度々毎に語り申さるゝ。吾此御宗門を崇び蓮如上人

をあふぎ奉る事は、全く逆縁によてかゝる果報の身とはなれり。其故は此鎭木の家代々天台宗を崇敬して、他事なく山徒の執心をたすけ、専ら念佛の弘通をにくむ。然るに去にし文明年中に、上人大津近松邊より北陸道に赴き、越前國細呂宜に居をしめ、其頃當國他國の門徒參詣す。愚老五十一歳、文明五年三月十八日の夜不思議の靈告をなん感じける。同七年三月下旬、當國の下司富樫助次郎と百姓共と不和の事出來て、遂に百姓一揆に及ぶ。其張本皆々吉崎の御門徒なれば、人々皆與力して富樫を責、富樫も蟻螂あざむき難うして、飛檄をもて同下司鎭木・田屋を頼み、一揆を追拂ふべき旨再三に及ぶ。其の儀は、助次郎が姉婿也、殊に入魂の間ひたすら申越けり。其頃嫡子右衛門は京都在番、次男吉藏は十八歳、家司水嶋庄助・同源五・齋藤小六郎など云ふ一人當千の若黨ども引率、田屋小次郎も郎徒足輕を召具して一揆と戦ふ。田屋が郎等二・三人討れ、某も郎等共少々手を負ひ、水島兄弟に下郎二・三人と成、鎭木が城松任へ引退き、城中へかへり、先づ持佛堂を開て、物故せし齋藤小六・堀市彌其外亡魂を回向し、兼ては我手に討取